

タイおよびインドネシアにおける青少年の 体力に関する調査報告

大 山 良 徳*

I はじめに

この調査は「東南アジア熱帯の自然環境が人間の諸活動に及ぼす影響に関する調査研究」と題する、昭和48年度海外学術調査の予備調査として行なわれたものである。すなわち、この調査は経済学・社会学・農学など15の専門領域から構成されているが、筆者らはその一領域である熱帯下における青少年および成人の作業能力を、体力医学的に検討しようとするものである。

われわれはこれまで京都大学教養部兼体育指導センター所長田村喜弘教授を中心として、日本の都市・農村における青少年の体力が、遺伝および環境要因によってどの程度独立に、あるいは要因相互にからみ合っているかについて比較研究を行ってきた。しかし東南アジア各国の体力の現状ないし資料はほとんど持ちあわせていない。

そこで筆者がその先発的意図の下に、さきに述べた海外学術調査の所期の目的を遂行するための手掛りをえて、今後の計画立案に資するべく1973年1月9日より2月1日までの期間、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシア、およびホンコンを訪問し、東南アジア各国青少年の体力と学校内外における身体活動ないし学校施設・設備などについて調査を行なった報告である。

* 京都大学体育指導センター (The Center for Physical Activity Instruction, Kyoto University)

ただし個人の調査活動には自ら限界があつて、その短所をできるだけカバーしようと試みたが、今回の報告は短期滞在ないし調査内容の性格上、タイおよびインドネシア両国の調査結果に限定される。したがって調査対象およびその内容も、初等・中等学校児童・生徒の学校内外における身体活動ないし学校環境に限定せざるをえなかった。なお体力の問題は、海外学術本調査によってより明確に検討されると考えられるが、今回の資料収集によってえられた青少年の体力に関する比較研究報告は次回にゆずりたいと思っている。

II 調査の目的

調査の基本的態度は、刺激的気候をもたない熱帯環境下における人間の作業能力を、体力医学的に検討するための手掛りをうるために、東南アジア諸国青少年の体力の実状とこれを制約するであろう諸要因を都市・農村別に観察し、今後の調査計画立案のための基礎的資料を提供することにあつた。したがってその基本的態度達成のための目的を細分化すれば以下のとおりである。

- 1) 調査実施のための公的協力機関を明らかにし、調査ルートを確立すること。
- 2) 青少年および成人の体力を資料収集によって明らかにすること。
- 3) 青少年の学校内外における身体活動の現状を観察すること。
- 4) 学校環境（施設・設備）および学校の

特質を調査し、標本校選定のための資料を提供すること。

5) 東南アジア諸国の教育制度を明らかにすること。

これらのうち、2)の項目については改めて一篇にまとめる所存である。それゆえ今回の報告は、2)の項目を除くすべての調査結果について報告しようとするものである。

III 調査内容と資料

あらかじめ用意された調査内容は、さきに述べた目的の大枠の中で決められた。これらのうち筆者がもっとも重要視した内容は、公的機関の協力要請と調査確約をうること、さらには調査協力者をえて本調査にそなえることであった。第2に調査標本校を選定するための諸条件を見聞し、選定基準を検討しながらタイおよびインドネシア両国における体力調査に関する基本的方法を明らかにすることであった。

その内容を詳細に列挙すればつぎのとおりである。

この調査に関する公的機関の所在とその機関名、機関長名を明確にすること、また初等・中等学校の学校長ないし体育専任教師に面談し、それぞれの学校の規模と施設、児童・生徒の家庭環境の概況を知ること、体育館、プレイグラウンドの有無、施設・設備・用具の保有状況、健康診断の内容、体力テスト実施の有無またはその資料の有無を聴取すること、さらには屋内授業・体育授業内容の見学等のほか社会体育施設、学校外における身体活動状況などを観察することであった。

一方、資料としては面接による以外の体力に関する資料を学校に求めた。しかし、各訪問校からはほとんど入手不可能であった。わずかにアユタヤの Khian 初等学校には日本でいう父兄連絡用の通知簿形式の個票があり、この1欄に学期別（3学期に分かれている）

身長・体重の測定値が記入されていたのは、児童の現体格を知る手掛りとなるほか、彼らの発育過程を分析する上で貴重な資料である。しかし整理された資料はない。ともあれ現存する資料が少ないなかでこの資料の価値は高く評価されてよからう。

さらにタイにおける ICSPFT のデータはバンコク市およびその周辺地域における青少年の体力を知る上で重要な資料である。これらに関する紹介と考察は次回にゆずりたい。

なお東南アジア各国を訪問して筆者がもっとも入手を欲した資料は、それぞれの国のエイジングからみた体力の全国平均値であった。もちろん、日本でまとめられている文部省発行の全国学校保健統計調査報告書ないし体力・運動能力調査報告書、壮年体力テスト調査報告書に類する資料までは期待しなかったが、少なくともこれらに関するブロック版ともいべき資料を現地の日本大使館、タイ国文部省、厚生省、通産省、ユネスコ・オフィスなど各省、各局に求めたが何らえられなかった。

しかし局部（都市）的に観察すればさきに述べたとおり、タイでは体力テストが小規模ではあるが、チャングワットを中心に実施されまとめられている。未整理ということで資料こそ収集できなかったが、インドネシアでもスポーツ・青少年局において、ジャカルタにある数校の初等・中等学校で体力テストが実施されているようである。

IV 調査法と協力機関

調査の方法はこれまで筆者らが日本で行なっている標本校の概念をもって、これをいちおう今回調査の基本的モデルとして考え、地域別すなわち都市部・都市周辺部および農村部に所在する初等・中等学校、また都市部では公・私立別に学校を訪問し、学校長および体育専任教師に面接するといった面接法と併せて、観察と資料の説明を求めて理解しよう

と努めた。

協力機関

タイ国

- 1) 調査許可証申請のため NRC(National Research Council) に依頼
- 2) Division of Foreign Relation, Office of the Under Secretary, Ministry of Education
- 3) Division of Elementary Education, Department of General Education, Ministry of Education
- 4) Department of Physical Education, National Stadium
- 5) Division of Physical Education Promotion, National Stadium

インドネシア国

- 1) Department of Sports and Youth Affairs, Ministry of Education and Culture
- 2) Physical Fitness Research Institute
- 3) Embassy of Japan

V 調査範囲と調査期間

タイに滞在した期間は、1973年1月9日～20日までの12日間であったが、調査前にNRCからの調査認可と体育局への調査協力依頼書および承認書を得ていたので調査は予想以上に順調で、主としてバンコク市を中心に行なわれた。その理由は都市に散在する初等・中等学校は種々あり、公・私立の教育環境の相違はもちろんのこと、学校環境、地域環境および家庭環境の差異がおのずから青少年の体力に影響しているであろうと判断し、広く諸条件を理解して標本校の選定に対し適正な評価をしたかったからである。さらに調査範囲はこのバンコク市周辺のチャオプラヤ河流域のほか、バンコク市西方約45kmに位置するナコンパトム地方およびバンコク市北方約55kmに位置するアユタヤ地方の農村地域が含まれ

る。

インドネシアに滞在した期間は1973年1月24日～30日までの1週間であった。ここではジャカルタ市とその周辺部（郊外）のみの調査範囲にとどまった。それはタイの場合と異なり、短期間の滞在による理由のほか、事前の調査協力機関との連絡不十分で、インドネシア文部省との型通りの交渉に時間を費やしたことなどによる。しかしその成果については、標本校選定のための十分な観察と面接による資料をうることができたのはいうまでもない。

なお調査されたそれぞれの学校名は次節で詳しく述べることにして、ここでは省略する。

VI 調査成績：概況と考察

調査概況に入る前に、まずタイおよびインドネシアの教育制度について簡単にふれてみたいと思う。

タイ国の義務教育年限は、初等学校のみで1～7学年の7年間、年齢は6～12才までである。日本の年限より2年短い。これを終えて能力のあるものは中等学校に進学する。中等学校は3年間(13～15才)、さらに高等学校2年間(16～17才)を経て大学に入学すれば4年間(18～21才)の教育過程が課せられている。したがって初等学校へ入学して大学まで進学した場合、教育年限を通算すれば日本の制度と年限的(16年間)には変りなく21～22才で大学を卒業することになる。つまり7・3・2・4の教育制度を採用している。

学期は2学期制または3学期制が採用されている。2学期制の場合、普通5月に始業し、10月までの6カ月間で1学期が終業する。続いて約1カ月程度の試験休暇があり、2学期は12月初旬から開始されて翌年3月までの4カ月間で終了する。そして新学年開始の5月まで約1カ月間の学年末休暇がある。

3学期制の場合、5月始業は2学期制の場

合と同じであるが、8月中旬で1学期が終業し、2週間程度の試験休暇のあと9月から2学期の始業、12月中旬で終業し、さらに2週間程度の試験休暇があって3学期は翌年1月に開始されて3月に終了する。そして新学期が始まる5月までの1カ月間は気候条件が不良とされているため日本でいう夏休みともいうべき長期休暇がある。現地ではこれを学年末休暇とよんでいる。

インドネシア国の義務教育年限は初等学校のみで年限で1～6学年の6年間、年齢は6～11才である。これは日本の年限より3年短い。制度としては6・3・3・4の体系を採用しており、これは日本の制度と同じである。

学期は日本同様3学期制を採用しているが、その開始時期は日本、タイ国のそれとは異なる。すなわち、1月に始業し12月に終業する。学期の内容はつぎのとおり。

1学期は1月に始業し3月に終業、2週間の試験休暇があり、2学期は4月から8月までで約2週間の試験休暇があって9月から3学期が開始され12月初旬に終了する。これ以後次年度の新学期が開始される1月まで約3週間の学年末休暇がある。このほか8月には約1週間全国でスポーツ祭が開催され、児童・生徒達はこのゲームに参加する。

この報告では紙面の都合もあるので、筆者が訪れた数ある学校のうち、タイおよびインドネシアにおける典型的な学校について記述することにとどめたい。もちろんここでいうタイ、インドネシアとはバンコクおよびその周辺、ジャカルタおよびその周辺地域に限定されていることを意味し、以下この報告書はこの条件を前提とする。

1. タイ国

最初に訪問した学校はバンコク市中心にあ

る私立初等学校であった。この学校は男子部・女子部に分離され、それぞれの教育方針と教育計画の下で教育が行なわれていた。校舎は木造建築に併設して1部コンクリート建築（男子部）が並んでいた。

このようにタイでは校舎のみをとりあげたとき、公・私立を問わず新築ブームで鉄筋コンクリート建が旧木造校舎と対照的に建てられている。いずれも木造校舎は老朽化しているので、近い将来これらの校舎は姿を消すであろうが、タイ政府の教育施設への熱意がうかがわれる。

女子部の校舎は2階建モルタル造りで、この校舎と男子部校舎との間にかかなり広い運動場を有し、そこにはフットボールコートとバスケットボールコート（1面）があった。ちょうど訪問したとき、プレイグラウンドではフットボールを、バスケットボールコートでは80名へらいの児童を対象に体育の授業が行なわれていた。写真1がそれで、2名の教師がハンドマイクで呼びかけ、児童は楽器と号令（児童自身の発声）に合わせてリズム運動を行っていた。その内容は日本と変わらないが連続運動のなかにアクセントをつけるために号令（気合い）を採用していたのは興味深い。

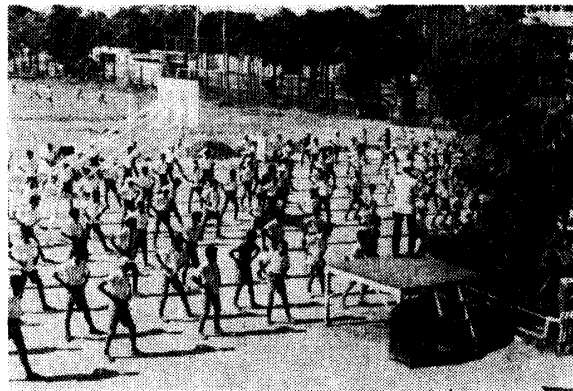


写真1 楽器に合わせて行なうリズム体操
（私立初等学校・バンコク）

さらに気づいた点は教師の服装で、日本でみられるトレパン、トレシャツ、運動靴のいでたちはみられない。この学校では児童達も運動のための特別な服装は着用していない。写真にみられる児童着用のシャツ、短パンツ、通学靴は制服である。

児童・生徒の体型はどちらかといえばやせ型（痩身）で、日本の都市にありがちな肥満児はみられなかった。この傾向はこの学校に限らずタイおよびインドネシアにあてはまりそうである。このことは熱帯下という気候に支配された食習慣の影響が、そのすべてではないが体型に関係しているものと推測される。というのは彼らの食習慣を観察したとき、昼食についていえば弁当（細長い筒にごはん、副食物などを積み重ねたもの）を持参する児童はごくわずかで、児童の大部分は学校近辺に集まった露店（3輪自転車につんでくる）で買喰いしながら昼食をすませる傾向があるからである。それは日本の戦前にみかけた1銭店屋を想像していただくといよい。

とにかく子供に限らずタイ人は買喰いが好きである。昼食時は涼しい木かげでオフィスの男女成人までも、よく買喰いをして楽しんでいる風景はのんびりムードで、あくせくした日本人には何ともうらやましい。もちろん学校給食はない。これはタイに限らずインドネシアでも実施されていない。

ところで食事内容はタイ料理ということになるが、これも種々さまざまの料理があって一概に説明しにくい。一般にライスに野菜（タイ独特の産物）、くだもの（豊富）、スープそれにやきとりがつけば上等で、普通これらのライスにタイ料理特有の香りと辛さの調味料をふりかけ、ライス以外は一皿のものを皆で食べる習慣である。暑さで機能低下によって招来される食欲を増進させるには、これらの調味料は欠かせないものであらうと考えられる。

つぎに、教員養成大学には教育実習のための付属初等学校がある。訪問したこの学校の校長は女性であったが、タイでは女性が各職場で主要ポストについていることも多いので、女性学校長も珍しくはない。ここに学ぶ児童達は上層にランクされる家庭の子弟である。家庭の経済に関係されると思われるが、女子児童達は体育授業のためのユニフォームと運動靴を着用している。しかもトレシャツはクラスによって色別されている。通学には通学用の制服を着用しているが、この初等学校のスクールカラーはシャツは白、スカートはあざやかなブルーであった。女子児童のみの学校という関係もあろうがフットボールのための広いプレイグラウンドはなく、狭いながらもバスケットボールコート1面、バレーボールコート2面が整然と設置され、外周はランニング用に供されていた。

コートでは、教育実習生が1クラス約40名を対象に体育の授業を行なうところであった。その内容は、準備体操に始まり、主運動（バレーボール）を行ない、整理体操に終わるといったもので日本の体育授業と異なるところはない。しかし主運動前後の体操はリズムに合わせた運動を行ない、かつウォームアップにランニングを採用していたことは意外であった。というのもタイ・インドネシアを通じてランニングをしている授業をあまりみかけなかったからである。

写真2は、タイ国空軍の子弟達が通学する学校（Chang Oradumroong School）の体育館で、低学年の子供達が隊形をとり体育の授業を行なっているところである。室内には卓球用テーブル以外は何もおいてない。体育館は木造ではあったが、体育館をもたない学校の多いタイでは施設・設備はよいほうであらう。また広い芝生のプレイグラウンドはすばらしく、フットボールコート、バスケットボールおよびバレーボールコートのほか柔道場

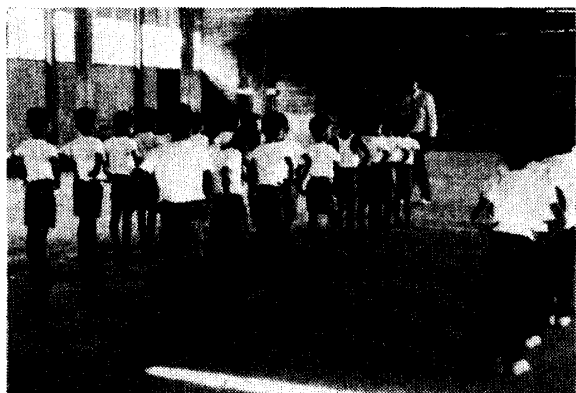


写真2 体育館での体育授業
(Chang Oradumroong 初等学校・
バンコク)

もみられた。さらに注目したいのは、ここには幼稚園、初等・中等学校（児童・生徒総数2310名）があって一貫教育が行なわれていることである。規律正しい授業の中にも生徒達（男女共学）はゆったりした学校生活を送っていた。

タイでは通常毎朝7時すぎに学校が始まる。朝礼、国旗掲揚そして学校長訓話の後、授業が開始される。このようにタイでは朝の涼いうちに授業が開始されるので、タイ人は早起きである。体育の授業は他の教科に優先して、時間割では午前10時頃まで、遅くとも午前中に終了するよう組み込まれている。そして児童・生徒達は午後2時頃までには下校する。

この学校の体育の授業はきびしく、整列訓練など方向変換に関する基本訓練が行なわれている。もちろんスポーツを行なうのは当然であるが、時間数からみて体育の時間数は初等学校で週1時間、中等学校で2時間しか実施されていない。というのも体育専任教師はわずかに4名、これは児童・生徒数からみてこれ以上の体育授業は行なえない実状にある。初等学校低学年では日本の場合と同様担任が体育の授業を受け持っている。このように教育組織・内容からみると、さきに述べた外形的な教育施設・設備に対する教育投資とは対

照的に低調で、今後の課題として残されている。

写真3は、2部制の公立初等学校である。タイでは義務教育制度が昨年から改正され、4年制が7年制と義務づけられた。したがって義務年限3年延長に伴い学校数がこれに追いつかない過渡期にある特殊事情と人口増加がその一因と考えられ、このようなシステムをとっている学校は少なくない。午前の部と午後の部に分かれているので、児童は家庭ないし買喰いによって昼食をすませる。

この学校はバンコク市の下町地域ともいえるところに位置し、児童数に比べて学校（教室数と教員）が不足している地区である。概して下層家庭の子弟が通学している。しかし校舎は立派でコンクリート建3階と2階があり、窓はほとんどガラスを使わず開放的で、通風条件が考慮されているので室内はかなり涼しい。特別教室のほか図書室も設けられている。運動施設としてプレイグラウンド（フットボール用）は広いが、珍しくここでは芝生が植えられておらず、砂地であった。

タイにあるプレイグラウンドは通常緑（整備・未整備の別はあるが）で覆われている。運動靴を着用して運動することを常とするが、素足で行なっても危険を感じない。芝生では砂地で不能なローンワークも可能であり、子

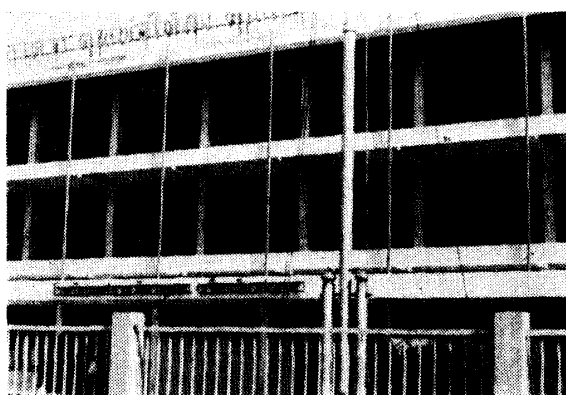


写真3 バンコク市内にある2部制の公立
初等学校（バンコク）

供達の興味と運動内容を豊富に展開できる点で有効と考えられる。このほかバレーボールコート、バスケットボールコート各1面が用意されていた。

写真4は、Chulalongkorn 大学付属初等学校（男女共学）の体育授業で、女性体育教師指導の下、3年生（8才）が走り幅とびのテストを受けているところである。

この学校はタイにおけるモデルスクールの性格上、すべてが近代化されているとあってよい。児童も教師も日本同様運動のためのユニフォームを着用し、教師対児童の人間関係は親密で、型通りの指導法にとらわれず自由に授業が展開されていた。また校舎はすべて鉄筋3階建てで教室の採光・通風の考慮はもちろんのこと、保健室・休養室も設けられ、school nurse がその管理にあっている。このほか、特別教室の設備・備品についても日本の水準と何ら変わるところはない。むしろ広い緑の絨毯をしきつめたプレイグラウンドと青い空が校舎にマッチし、しかもキャンパスが広く精神・心理的にゆったりしている点は日本のレベル以上であろう。

このようにバンコク市内においてさえ学校差は大きく、さきに述べた2部制学校とは対照的である。ちなみに1～7学年の総児童数は約1000名、1学年6クラスであるから平均して1クラス児童定員は約25人である。これに教職員80名がこの学校のスタッフであるので、1クラス2名の教師が配置されている現状は理想的というほかはない。

ついで同大学の付属中等（1～3年）、高等学校（1～2年）があるが、ここは生徒総数約1000名、教職員80名、うち体育専任教師は6名で専用の広い教官室をもっている。体育の授業は週2時間で午前中に実施され、午後はない。体育施設としては体育館、柔道場のほか400mの陸上競技場、フットボールコート、バスケットボールコートが設置されて



写真4 3年生児童の走り幅とびテスト
（Chulalongkorn 大学付属初等学校・バンコク）

いた。

この学校の近くに位置して教員養成大学の付属中学があるが、これも規模としては同程度で生徒総数約1000名、教職員96名、うち体育専任教師4名で構成されている。ここでは、400mのプレイグラウンドで1000mの持久走テストが行なわれていた。暑いので休憩の生徒達は木かげに集まっている。さきに述べたようにランニングのみの体育授業は珍しく、通常はランニングがウォームアップに組み込まれる程度であるが、ここでは広く各種スポーツのほかランニングがカリキュラムの中に採用されていたことは注目に値しよう。

タイの学校教育における体育科教育カリキュラムに組み込まれているスポーツを、全体に対するウェイトの順に考察すれば、男子ではフットボール、バスケットボール、卓球、バレーボール、フォークダンスなど、女子ではバスケットボール、バドミントン、徒手体操（リズム運動）、フォークダンスなどがあげられる。

このほかタイでは、次ページの図のようなタクロウという籐であんだ直径15cm（大小ある）、重量200～300g、値段は日本円で200～500円ほどの球を、手をいっさい使わないで足のみで蹴り合ってプレイする運動（日本の蹴まりに似ている）があり、これをバレーボ



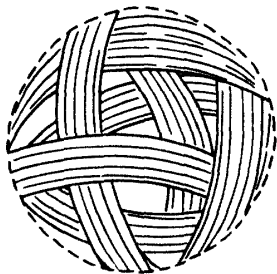
写真5 グラウンドでの体育授業
(Taweetapesake 高等学校・バンコク
郊外)

ールのようなルールにスポーツ化して採用していたのは興味深い。これを子供達は放課後または帰宅後の遊びに利用する。

この教員養成大学付属中学に近接して同大学の付属初等学校がある。ここでは1年生が体育館でバスケットボールのドリブルの練習中であつたが、彼らは一般用のバスケットボールを使用させられていた。代用したのかもしれないが、能率的指導効果をあげるとすれば、使用球の大きさは児童達にふさわしいボールに変えるなど教育的指導配慮がなされるべきであろう。

タイの大部分の学校にはスイミングプールがない。それゆえ子供達はよく近くの非衛生的な運河で泳ぐので、学校では National Stadium のプールを利用するよう指導している。しかし遠い地域の子供達が利用してい

タクロウ



るかどうかは疑問である。このような現状にある中で、この付属初等学校には実にモダンなプールがあり、児童達に開放されている。

チャオプラヤ河のほとり、ワット・アルン近くに公立 Taweetapesake 中・高等学校がある(写真5)。この学校はバンコク市郊外トンブリにあり、校舎は昔のタイ風の面影を残す床高と窓なしの廊下から成る木造校舎、トタン屋根と格子窓で構成された平屋木造校舎、これらと対照的に近代鉄筋ビル4階建が混在している典型的な過渡期にある学校といえよう。このことは教育内容、組織にも影響を与えているようで、生徒総数約900名、教職員81名、うち体育専任教師はわずかに2名であった。したがって体育の時間は週1時間、2クラス約55名の合併授業で条件は恵まれていない。

この日、体育授業の最初から見学する機会に恵まれた。ベルが鳴り、生徒は各組1列に整列した。カラフルなユニフォームでブルーの組とグリーン組にクラス分けされている。しかし運動靴の着用はまちまちで素足の生徒もいる。教師は平常服。授業内容は10分のウォームアップ後フットボールの基本練習約10分、その後4チーム、2コートでゲームが開始されるといったものであった。このプレイグラウンドは芝生より砂地のほうが多く、



写真6 農村地域の公立初等学校
(Omnoi 初等学校・ナコンパトム)

荒れていた。1時間60分授業。カリキュラム内容は主にフットボール、バスケットボールが配当されていた。雨期（7～8月）には、体育館がないので各教室で実技以外の授業が行なわれるという。なおこの学校のフットボール・チームは1972年 Municipal Football Tournament で優勝している。

写真6は、バンコク市西方約45km、車で約1時間半のところにある農村地域ナコンパトムの公立 Omnoi 初等学校である。農村らしく校舎の大部分はまだタイ特有の木造平屋建が残っている。床高で廊下は広く開放的で、暑熱をしのぐには有効であるが、採光に乏しく教室はうす暗い。乾期には水が不足するので雨水を利用するための貯水槽も用意されている。プレイグラウンドは広く200m×200mはあろうか。フットボールコートを設定するとすれば3面確保にはこと欠かない広さではあるが、そのため管理不十分となり、一部の芝生を除いては他の雑草が生いしげっていた。この学校の児童達は素足が多く、靴着用者は少ない。このことはバンコク市内学校の傾向とは逆である。

写真7は、7年生男子生徒達によるフットボールゲームであるが、ここでも生徒達の大部分は素足であることに気づかれるであろうが芝生であるから危険は感じない。むしろ靴

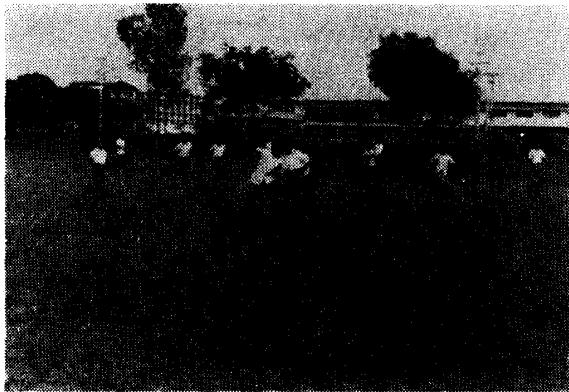


写真7 7年生生徒達のフットボールゲーム
(Omnoi 初等学校・ナコンパトム)



写真8 児童達のウォームアップ
(Hany Jorake 初等学校・ナコンパトム)

着用の非衛生を考えると素足は健康的一面をもっている。ゲームは日本の同年齢と比べたときさすがにうまい。これも小さい頃からフットボールを行なっているからでスキル面では有利だが、しかし動作においては鈍さがみとめられる。熱帯という気候の影響が人体の活動を制約しているためであろう。

Omnoi 初等学校の1～7年までの総児童数は約700名、教職員71名、1学年4クラス、1クラスは30～40名で体育専任教師の定員はないのでクラス担任が体育の授業を受けもっている。

この地域環境はバンコク市とは対照的にビルはなく、平原の続く農村地帯にあり、家屋はかやぶき木造平屋で、ココナッツ、バナナの栽培のほかタイ料理材料の野菜が手広く栽培されている。

タイでも地方にいけば日本という教育委員会的性格をもつオフィスがある。そこで、この地方とパトム・ターニ、ノンタブリ、サムット・サコン、サムット・プラカンの五つの領域を統轄するオフィスの紹介で訪問した学校が、公立 Hany Jorake 初等学校である(写真8)。1～7年までの児童総数は857名、教職員34名、うち体育専任教師1名が体育を担当している。それゆえ児童達は週1回の体育授業を受けているにすぎない。タイにおける



写真9 バドミントンコートと狭いグラウンド
(Khian 初等学校・アユタヤ)

1時間授業とは正味60分で、日本の45分授業とは異なる。このように発育盛りの児童達への合理的運動刺激が不足していることは、体力医学的にみても問題が残る。このことはフランスの解剖学者 Roux (1850-1924) が「生体は使わなければやせ衰える。適当に使えば発達して増大する。過度に使えばやせて障害を起こす」という説からも十分理解しうるものである。もちろん児童達の運動刺激は学校における運動に限られたものではないから、帰宅後の家庭生活で、どの程度の運動刺激の機会と量があるかということも検討されなければならない。これらについてはこの章のあとでふれたいと思う。

体育の授業内容はさきにもふれたように、整列法（横隊・縦隊形のとり方）の練習等が準備運動前に実施されるのが普通のようなのである。この学校は Omnoi 初等学校と異なり全員がユニフォームと靴を着用していた。ちなみに観察すれば、男児童と女児童の靴とソックスが色分けされているのに気づかれるであろう。

またタイにおける有名な寺院 Paratomjandie 境内にある初等学校は、鉄筋と木造のかなり整った校舎から成り、規模は大きい。児童総数1～7年約1000名、教職員37名、うち体育専任教師1名。この日は室内授業で、姿

勢教育が行なわれていた。実技のできない雨期にはこのような方法がとられるのであらうと想像した。同じくナコンパトムにある公立 Mearm 初等学校は5～7年の上級学校である。義務教育年限の延長に伴いその過渡期にあって、地方ではこのようにまだ1～4年、5～7年の下級・上級初等学校が分離して残っている。緑一面のプレイグラウンドのほかフットボールコート、バスケットボールコート、卓球のできるホールがあった。これまでの学校と異なる点は床の高い（約2m）木造校舎で通風がよいこと、学校長は体育を専門とする教師であること、また教職員のすべてが軍服に類似するユニフォームを着用していることなどである。男生徒159名、女生徒103名、教職員はわずか10名であった。

アユタヤはバンコク市北方約55km、車で約2時間の距離にある。純農村地帯で田畑が延々と続く平原地帯には、稲刈りあとの稲積みが見られるところにある。児童達は日本の農村にみられるように徒歩通学である。人家は散在し、おもに果樹・野菜を栽培している。写真9は、このような環境下にある公立 Khian 初等学校である。学校規模は1～7年まで17クラス、生徒総数680名、教職員18名、体育専任教師はいない。1クラス児童数35名、したがって1学年70名前後である。校舎はすべて木造、プレイグラウンドは写真にみられるような広さで、ほとんどないといってよい。それは日本における幼稚園の遊び場程度である。農村地域の学校としては珍しいケースであろう。それゆえ、担任による体育の授業は遊戯しかできないという。しかも体育の時間は朝の涼しいうちに週1時間だけが配当されているにすぎない。

ただし調査上、価値あることを認めたのは、この学校では家庭との連絡のために、児童達の通知表が作成されていることである。これは個人記録票（行動記録・成績・発育状況）

とでもいうべきもので、その一部に学期ごとに測定された期日と身長、体重の記録が記入されている。平均値など未整理であったが、筆者らの今後の調査研究にとって重要な意義と価値をもつものと高く評価される資料である。なお形態計測は身長・体重のみで体力テストは全く実施されていない。

2. インドネシア国

文部省スポーツ・青少年局では小規模ではあるが、体力テストが実施されていた。しかし未整理とのことで資料の収集は断念した。写真10は、ジャカルタ市内の公立 S. D. Mexico 初等学校である。グラウンドは狭くかつ小石が多い。学校規模は1～6年まで児童総数558名、各学年約100名程度、教職員14名、体育専任教師はいない。1クラス児童数約50名である。体育は担任が担当する。それは週1時間で45分授業。おもにバスケットボール、バレーボール、バドミントンおよびダンスがカリキュラムに組み込まれている。しかし屋外は暑いので晴天時でも体操館を使用するそうである。その場合はおもに徒手体操またはリズム体操を行なうことが多い。水泳は National Stadium でいっせい指導を受けている。

インドネシアの学校はほとんど木造平屋建校舎、屋根は赤瓦で近代建築はみられない。



写真10 2部制初等学校のグラウンドと校舎
(Mexico 初等学校・ジャカルタ)

旧校舎そのままで使用されている場合が多い。すなわち教室の採光は考慮されておらず、腰高の壁に囲まれた上部に、通風と採光を兼ねた窓はあるがガラスは入れていない。さらに出入口は1カ所で密閉されており、室内はうす暗い。児童達の視力が気になったが視力検査は実施されていない。このような建築の利点は輻射熱を防ぐのには有効と考えられるが、採光・通風の面から考察すれば衛生学的にはマイナス面が指摘されよう。また日本では毎年1回定期健康診断が実施されているが、インドネシアでは入学時に実施するだけで入学後は卒業するまで、健康診断のほか形態計測、体力テストも行なわれていないのが実状である。これらの点から、児童達の健康管理が今後の重要な課題として残されている。医師の充実もさることながら、教員養成大学での健康教育の徹底、school nurse の養成等援助が望まれる。

写真11は、体操館であるが、屋根と支柱のみ、床はコンクリート張りなので天井の低い大ホールまたは雨天体操場といったほうがふさわしいようである。室内にはバスケットボールのゴールのほかバドミントン・セットおよび卓球用のテーブルが常備されていた。前面は開放されているから室内はかなり涼しい。

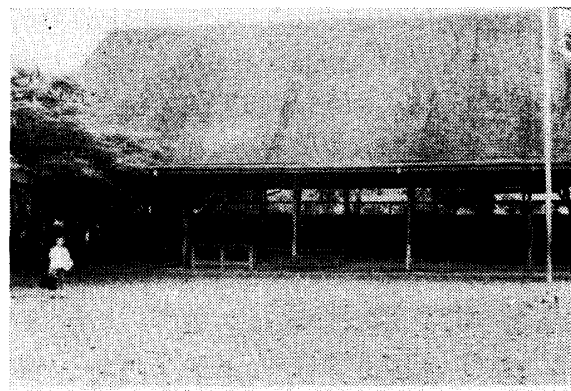


写真11 公立初等学校の体操館
(Mexico 初等学校・ジャカルタ)



写真12 3部制公立初等学校の校舎とグラウンド
(Rawakemiri 初等学校・ジャカルタ郊外)

この学校の校長は女性であったが、タイ国同様学校関係での女性の活躍はめざましいものがある。児童達には制服があり、白シャツに茶の半ズボン（スカート）、靴の着用である。

インドネシアではほとんどの学校が午前・午後の2部制授業である。したがって昼食は家庭で終わるので学校給食は実施されていない。またタイ国同様、学校周辺には三輪自転車で運んできたにわかづくりの露店があり、児童達は買喰いを楽しんでいる。2部制授業は午前と午後の部の児童が異なるのは当然であるが、さらに奇妙に感じたのは教職員も午前と午後の部では異なるというのである。このようにインドネシアでは急激な人口増加に伴い、そのため公立学校が不足するというアンバランスが生じている。今後の当局の教育政策に期待するとともに、先進国の援助がほしいものである。

インドネシアでは金曜日の午後は回教徒の礼拝の日であり休日、もちろん土曜日は休日である。この学校（写真12）はジャカルタ市郊外にある Rawakemiri 初等学校であるが、学校の設備・備品においてさきの Mexico 初等学校とは大差がみられ、顕著な学校差が認められる。すなわち、校舎は木造平屋でさらに老朽し、教室は腰高の壁に囲まれ、上部は

金網と格子から構成された簡単な建物で体育館もない。プレイグラウンドも写真にみられるごとく、でこぼこで、バスケットボールのコートがあるだけである。児童達の体育の授業は、学校から徒歩で約10分ほどの距離にある公営グラウンドで行なわれている。さらに悪条件は午前・午後・夜間の3部制授業が実施されている点である。夜間は中等学校に開放されるといった複雑さである。午前の部は7時半～12時、午後の部は1時～5時半、夜間は6時から開放される。児童総数は1～6年まで午前・午後の部を合わせて520名、教職員13名、1クラス約45名である。児童数の約30%は中国人、70%がインドネシア人で構成されている。体育の授業は週2回、主たる内容は卓球、バスケットボール、バドミントンおよびフットボールである。児童の制服は白シャツに青ズボン（スカート）で、素足で通学する児童はいない。この近辺にバスはなく、人力によるベチャという乗りものがあるが、通常児童達は徒歩通学である。

児童達の体型はやせ型といったほうが適切であろう。体力は劣っているように観察された。日本では肥満児が問題になっているがインドネシアではむしろ“やせ”が問題にされそうである。このことは今後十分検討される



写真13 子供の日に開催された陸上競技会
(バンコク)

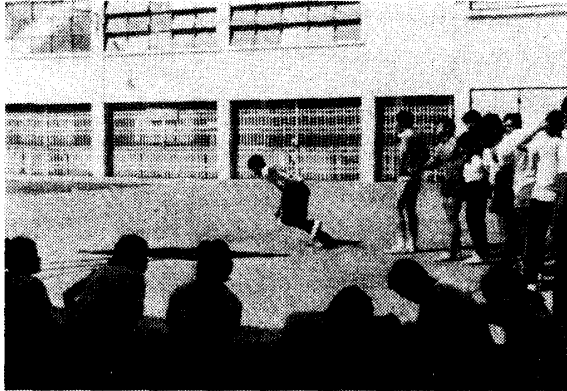


写真14 National Stadium でのトレーニング
(バンコク)



写真15 放課後のおにごっこ
(ナコンパトム)

べきで、早計の結論は許されないが、おそらくその一因としては食習慣に招来される栄養摂取（2食程度の食事量）および身体活動の量と質に起因していると推測される。

3. 子供達の学校外での身体活動状況

写真13は、1月12日、バンコク市 National Stadium において子供の日に開催された初等学校の陸上競技会である。表彰台も完備している。ここにはバンコク市内の各学校からバスを連ねて子供達が送り込まれてくる。彼らは終日ここで楽しむ。

National Stadium にはその他各種スポーツ施設がある。ここには放課後集まった運動クラブ員がトレーニングにはげんでいた（写真14）。また、夜には社会人も集まって洋弓、ウェイトリフティング、ボクシング、柔道等で汗を流す。柔道は子供達もここで練習する。

放課後は子供達にとって解放された自由な

時間である。下校前に木かげでおにごっこ（写真15）に興ずる子供達はいかにも楽しそうである。このように子供達は特殊なスポーツを行なうというよりは、遊びを通しての身体活動が多く、体力医学の調査研究にはこの点も重視しなければならないであろう。

このほかに注目したいのは、帰宅すると自分の所属するクラブに出掛ける子供達のことである。筆者が観察したのは、フットボール、バレーボールクラブに所属する子供達であったが、必ず指導者（成人）がこの指導にあっていた。

Ⅶ わが国との比較

一 相異点と類似点一

初等学校を中心に国別にみた教育制度、学校環境、体力・体育関係等の相異点と類似点をまとめると以下ようになる。

国名		タイ	インドネシア	日本
項目				
教	教育制度	初 中 高 大 7・3・2・4制度	初 中 高 大 6・3・3・4制度	小 中 高 大 6・3・3・4制度
育	義務教育年限	7年間	6年間	9年間
制	学期制	2学期または3学期制	3学期制	3学期制
度	学校授業形態	2部制の学校あり	ほとんど2部制授業	2部制はない

大山：タイおよびインドネシアにおける青少年の体力に関する調査報告

国名		タイ	インドネシア	日本
学校環境	学校建築様式	木造旧式と近代ビルの併設	ほとんど木造旧式	ほとんど近代ビル
	教室環境	通風はよいが採光はよくない。うす暗い	通風・採光ともによくはない。うす暗い	環境は比較的よい
	体育館	日本ほど完備していないがある程度みられる	ほとんどない ホールがある程度	講堂と兼用ならばほとんどの学校にある
	運動場	一般に広い 緑の芝で覆われている	一般に狭い 露出面が多く未整備	日本を基準に、露出面であるが整備されている
	保健・休養室	付属初・中等学校にあったがほとんどの学校にはない	特別教室の余裕はない	ほとんど整備され養護教諭の制度あり
体力関係	形態計測	身長・体重のみ実施されているところもあるが、ほとんど資料はない	実施されていない	毎年1回必ず実施
	健康診断	入学時にあるのみ	入学時にあるのみ	毎年1回必ず実施
	体力テスト	実施されていない	実施されていない	実施されている
	体型	肥満児はみられない	肥満児はみられず、むしろ“やせ”が問題である	肥満児が多くみられる
	学校外での身体活動	日本に比べて少ないがクラブに所属するものあり	日本に比べて少ない ただしクラブに所属する	日本の子供を基準として
体育関係	週内体育授業回数	1～2回	1回	3回
	1回の授業時間	60分	45分	40～45分
	体育授業担当者	体育専任教師 いなければクラス担任	クラス担任	クラス担任
	体育授業実施時刻	早朝か遅くとも午前中に終了する(2部制は例外)	早朝か遅くとも午前中に終了する(2部制は例外)	午後にも実施される
	おもな体育教材 (学年・学期・性) (によって異なる)	フットボール バスケットボール テーブルテニス	バドミントン バスケットボール バレーボール	ドッジボール ソフトボール フットボール
	授業内容としての 整列訓練	必ず実施している	—	特別な場合を除いてない
	体育授業時の服装	児童；ユニフォーム着用 教師；平常服が多い	ユニフォーム着用もあるがほとんど平常服	児童；ユニフォーム着用 教師；ユニフォーム着用
栄養関係	学校給食の実施	実施されていない。弁当持参もあるが買喰が多い	実施されていない。ほとんどは家庭で食べる	実施されている
	主食料理	米 タイ料理 特有の香りと辛さあり	米 インドネシア料理 特有の香りに油こさあり	米 日本料理 淡泊である
その他	制服の着用	ほとんど制服着用	ほとんど制服着用	一部にはあるが自由
	珍しいスポーツ	タクロウを使ったゲーム	特になし	—
	学校の休日	土曜・日曜・祭日	金曜午後・土曜・日曜・祭日	日曜・祭日のみ

ま と め

タイの学校は歴史的にみて寺院の境内ないし敷地に設立されている。したがって学校の規模例えば校舎、グラウンド、設備、備品、

児童数、教師数にいたるまで、寺院の規模の大小が学校の規模を制約していると考えられる。もちろん付属初等・中等学校などモデルスクールの規模は、寺院に関係なく市中に設

立されているのでこれらは例外である。

タイの体育科教育（体力関係）は決して十分ではないが、与えられた範囲内で着実に成果をあげていると思われる。しかしインドネシアの場合は、必ずしも良好とはいいがたく体育以前の問題が山積しているように思える。初・中等学校を通じて体育の時間は週1回ないし2回、インドネシアでは1回、その内容は男子の場合フットボール、バスケットボールがおもで、女子ではバスケットボール、バレーボール、インドネシアではバドミントン、バスケットボール、バレーボール等であり、初等学校ではこのほか種々な遊戯をさせている。またタイでは体育専任教師は中等学校1名のところもあり、多くて4名程度であった。なお初等学校でも規模の大きい学校になれば体育専任教師1名が配属されてはいるが、他はクラス担任が体育を担当している。インドネシアでは日本同様、すべて担任教師が体育教科を担当している。週1時間授業とは正味60分で、インドネシアでは45分である。付属初等学校には保健室があり、school nurseが配属されていたが、一般の公・私立学校は保健室をもっていない。またインドネシアでは特別教室を設置するほどの余裕はみられない。

身長・体重の計測は年1回または学期ごとに実施している学校もある。ただし胸囲・座高の測定はないし、ましてや日本でいう定期健康診断、体力テストは実施されていない。もちろん National Stadium オフィスには唯一のデータはあったが、これは特殊なケースといえよう。インドネシアでも定期健康診断は実施されていないし、さらには形態計測、体力テストなどは今後に残された課題である。また身体の発育発達期の運動の量と質、栄養摂取量および保健・衛生、健康教育、school nurse 養成等の問題はさらに早急に解決されなければならない重要な課題であり、今後の当局の教育行政に期待すると共に、これらに

対する先進国の援助が望まれる。

タイおよびインドネシアの初等学校はおおむね公・私立学校を問わずユニフォームを着用している。バンコク市、ジャカルタ市内を除く郊外および農村地方の子供達は徒歩で通学している。一般にタイ、インドネシアの子供達は日本のそれと比べて“やせ”ぎみで、肥満児は都市においてもみられなかった。身長は日本の子供の平均値に比べて小さいようで、体力関係でも持久性・敏捷性に欠けているようである。もちろん、記録をとってみなければ明確には答えられない。

食物の内容は一概に粗末とはいえない。なぜならたまご、豚肉、鳥肉などが材料として豊富に使われているものもあるからである。油っこく、かつ辛いものを好んで食べている。要はこれらの食物と常食をいかに組み合わせるかであり、日常の栄養摂取量と質、栄養素とのバランスが問題となろう。学校給食は実施されていないので、昼食は買喰いですますか、あるいは家庭での炭水化物系中心の食事に終わる。学校で軽食がとれるよう配慮されているところもあるが、一般には三輪自転車あるいは天秤棒でかついできたにわかづくりの露店で、子供達は好んでアイスクリームやあめ、くだものその他これらに類する加工品などを買喰いするのが常である。ミルクはあまり飲まない。

以上をまとめて考察すれば、開発途上国という東南アジア諸国に共通にみられる現状からみて、たしかに体力問題は体育を含めた教育以前の問題のあることは否定できないが、しかし近代化・工業化によって経済力が豊富になっていく過程で、反面副産物により人類にとって悪条件を造成することも否定できない。したがって、このような影響を受ける以前の人間の体力を知り、検討しておくことは、人類にとってもまた体力医学という学問領域からみても、その意義と価値はきわめて大き

いと考えるものである。

謝 辞

この調査研究に対し御懇篤なる指導・助言と機会を与えて下さった京都大学教養部教授兼体育指導センター所長田村喜弘博士に記して深甚の謝意を表します。またこの調査の遂行に際し、計画から現地での調査にいたるまで多大な援助と便宜を賜わった京都大学東南アジア研究センター所長市村真一教授ならびに計画立案に際し助言をいただいた海田能宏助手、さらに格別の御高配と惜しみなき尽力をいただいた京都大学東南アジア研究センターバンコクオフィスの水野浩一助教授、京都教育大学野口義之教授、Thailand National Stadium の Prof. Dr. Bunsom Martin, Director Booncher Suvarnabriksha および

京都大学東南アジア研究センタージャカルタオフィスの飯田経夫助教授、Indonesia Ministry of Education の Director-General Supardi, Dr. Hasnan Said の方々に対し、衷心から厚く御礼申し上げます。なお、協力をいただいた京都大学東南アジア研究センター編集委員の方々および同大学教養部保健体育学教室員の諸氏に対し感謝の意を表します。

文 献

- 1) Department of Physical Education (1968);
ทดสอบสมรรถภาพ พทางกายเยาวชน, พ.ศ. 2511,
Thailand.
- 2) Department of Physical Education (1970);
การทดสอบสมรรถภาพพทางกายเยาวชนไทย, พ.ศ.
2513, Thailand.